

## 「かながわの里神楽」

神奈川県民俗芸能保存協会 会員 垣澤 勉

### 里神楽の起源と系譜について

神楽の語源は「かむくら」からきていると言われています。「かむくら」は「神座」で、神の依りどころを示します。この神座に神を招き、その場で行われた魂鎮たましずめ（

・魂招の儀式を、古くは「かぐら」と呼んだと考えられています。

神楽の始まりは、天照大御神が天の岩屋に隠れ、世界が真暗闇になったとき、

あめのうずめのみこと

天之鈿女命が岩戸の前で大御神をお慰めするため、神懸って舞った舞のことで、神を樂しませることから「神楽」と呼ばれています。今でも宮中で行われている神楽を

みかぐら

「御神楽」、民間で行われる神楽を広く「里神楽」と言っています。また、神楽は形

態や発生により巫女神楽みこ・出雲流神楽・伊勢流神楽・獅子神楽に大別され、里神楽は

採物神楽（御幣や榊などを持って舞う神楽）で出雲流神楽が源流であると言われています。

里神楽は神代神楽じんたいとも呼ばれ、「古事記」「日本書紀」の神話をテーマとする仮面黙

劇です。京都の壬生狂言みぶや能、歌舞伎、文楽などの影響を受け、芸術性や娯楽性も加

味され完成されました。江戸初期に江戸で発祥し、本県に流入した時期は、市場神代郷神楽 萩原社中萩原諄夫氏所有の元禄四年（一六九一）の古文書の記録が最も古く、

はじ

武蔵鷲宮の土師流十二座神楽の流系であります。民間では「お神楽」「十二座」「二十五座」などと称しましたが、本県では明治の全盛期に入ってから、特に神代神楽と称するところが多くなりました。

里神楽の系譜としては、左記の三つに大別されます。

一、神事舞太夫系・神社に仕える巫職ふしやく・祈祷師で神主ではありません。主に七座の神楽舞を神前で奉奏しました。妻女いむめに市子いちこが多く、常人の近づきがたい聖職観念を持っていました。

二、神職系・神社の宮司・社掌しゃしょうで神楽師を兼ねた人々です。

三、弟子系・氏子系・神事舞太夫や神職系の神楽師の弟子が、明治時代の全盛期の波に乗って専門職になった人々のことで、現在では殆どおりません。また、氏子系とは海南神社面神楽師会のように、純粹の素人で神楽を習い覚えた人々です。

### （主な参考文献）

「かながわの祭と芸能」昭和五十二年 神奈川県民部文化室発行 永田衛吉著

「神楽と芝居」相模原及び周辺の神楽師と芸能 平成元年 相模原市教育委員会発行

「相模人国記」厚木・愛甲の歴史を彩った百人 平成十二年 飯田 孝著

横浜の神代神楽・神楽師たちの近世・近代 平成十九年 横浜市歴史博物館発行

### かながわの里神楽 七団体の紹介

江戸、明治、大正、そして昭和の戦中戦後の混乱を経て、平成の現代まで伝統を継承しております三浦市の海南神社面神楽、横浜市の市場神代郷神楽 萩原社中、子安神代神楽 横越社中、港北神代神楽 佐相社中、そして、県央地域の相模原市の番田神

代神楽保存会 亀山社中、与瀬祭礼芸能保存会、厚木市の相模里神楽 垣澤社中をご紹介します。

### 三浦市指定重要無形民俗文化財 海南神社面神楽保存神楽師会

三浦市三崎（会長） 湊 不二雄

三浦の総鎮守海南神社の面神楽は、埼玉県鷲宮神社に伝わる土師一流はじいちりゅうさいばら催馬楽神楽おおいにその起源を發し、江戸時代中期の文化年間（一八〇四～一八一八）に時の宮司・大井石見守秀香いわみかみひでたかによって氏子に神楽が伝えられました。草創期は質素なものでありましたが、徐々にその様相を整え、天保十一年（一八四〇）には神楽殿も創建され、本格的な里神楽が十一月初旬の「申酉」の日に、奉納神楽として奏されるようになりました。当時、町全体の九十%以上が漁師であったことから、人々の信仰心の拠り所としての神社と相俟って地域の風土にとけ込み、素朴さの中にも人間味溢れる神楽として人々に愛され親しまれ、今日まで氏子により傳承されています。昭和四十六年に三浦市指定重要無形民俗文化財となりました。現在の会員数は二十名、年齢も十代から八十代と幅広く在籍、市の諸行事及び各地のイベントに数多く出演し、郷土文化の一翼を担っています。



### 横浜市認定無形民俗文化財 市場神代郷神楽 萩原社中

横浜市鶴見区矢向（元締） 萩原 諄夫

萩原家は、江戸時代から続く神楽の元締（家元）で、鶴見区の潮田神社うしおだ、市場熊野神社、矢向日枝神社の宮司を務めてきた神職系の家柄であります。現在の元締である諄夫氏は二十代目にあたり、矢向日枝神社の宮司でもあります。

萩原家には、元禄四年（一六九二）の家督相続証文（神事を務める場所を記載）を始め、文政十年（一八二七）の神祇領状など、近世・近代の貴重な資料が多く残っています。その中でも嘉永四年（一八五一）の「御神楽次第」には、神代神楽の曲名二十八曲が記されており、幕末から明治にかけての所演状態が良く分ります。神楽面や衣裳も豊富で、武州鷲宮土師流を名乗り、横浜市や川崎市、東京都にて神楽の奉納を行っています。



### 横浜市認定無形民俗文化財

子安神代神楽 横越社中

横浜市神奈川区神大寺（元締） 布川 由美子

江戸時代から続く神楽の元締で、元々は神職系の家柄であります。幕末期の当主・萩原光政（最近になって、「げんば玄蕃」は誤りで「光政」が正しいことが判明。市場神代郷神楽の萩原家とは異なり、通称、子安の萩原家と呼ぶ）を父とする三兄弟が子安・萩原家（巖雄氏）、養子にいった照本家、横越家に分れました。その後、元締は横越家に引き継がれ、横越・照本両家によって神楽が継承されました。十七代目の元締であった横越政義氏は、平成二十六年五月に逝去され、現在は、横越家の長女・布川由美子氏が十八代目となっております。今次大戦中と数年前に神楽面や衣裳を焼失しましたが、見事に復興し、現在は、横浜市を中心に神楽の奉納を行っています。



### 横浜市認定無形民俗文化財

港北神代神楽 佐相社中

横浜市港北区下田町（元締） 佐相 秀行

「やがみ矢上」の通称でも知られています。初代・角之助氏は、笛の名手であった勇吉氏を兄に持ち、子安神代神楽師の元締・萩原巖雄氏に師事し、巖雄氏の死後、独立して佐相社中を形成しました。現在の元締である秀行氏は三代目で、社中には若手も多く、横浜市や川崎市を中心に、神楽の奉納を行っています。



## 相模原市指定無形民俗文化財

番田神代神楽保存会 亀山社中

相模原市中央区上溝(家元) 亀山 タケ

亀山家の先祖は、元々九州宮崎にいましたが、亀山斎宮氏が江戸中期、元文年間(一七三六〜一七四一)に相州上溝郷番田に居住しました。斎宮氏は名字帯刀を許され舞人と神事の職にありましたが、江戸中期、郷(里)神楽の家元を命じられ、今日に至っています。

亀山家には、天明八年(一七八八)に川崎の山王社祈願所の神主鈴木丹後から宮内氏あてに諸事神事と神楽を命じた神道裁許状や、明治九年(一八七六)、十三代目勘蔵氏に神道事務局から与えられた二十二曲の神楽試験済み許可書など、数多くの古文書が残されています。

昭和九年(一九三四)、時恵氏は十四代目父・岩男氏の神楽の指導を受け、十五代目の家元となりました。神楽は元より、神楽の後の余興に芝居や歌舞伎も行っていました。だが、昭和三十六年、相模原市の無形民俗文化財の指定後は神楽に専念しました。この頃より、日本神話を知らない人たちに、神楽の演技の内容を理解して貰うため、舞台の袖で神楽の解説を始めました。昭和五十五年、時恵氏の死後、重好氏が後を継ぎ、神社の公演以外にも活動の幅を広げ、神楽の普及と拡大に尽力しました。平成十年、氏が六十八歳の若さで逝去後、現在は夫人のタケ氏が十七代目の家元となり、相模原市を中心に御神前之舞と神楽の奉納を行っています。



## 相模原市 与瀬祭礼芸能保存会

相模原市緑区与瀬（会長） 柏木 昭治

江戸時代から八王子の江戸の神楽師と相模の神楽師がこもごも出演し、八王子を中心に神楽の奉納を行っていましたが、現在は与瀬神社の氏子を中心に、同好会組織で運営しています。

現在の会長は柏木昭治氏で、相模湖与瀬神社の宮司でもあります。所有する神楽面には名匠の作も多く、衣裳も立派です。現在は、与瀬神社の祭礼を始め、相模湖近隣の神社で神楽の奉納を行っています。



## 厚木市指定無形民俗文化財 相模里神楽 垣澤社中

厚木市酒井（家元） 垣澤 勉

江戸時代より、愛甲神楽の家元・神事舞太夫萩原英之進家が神社奉納の神事として神楽を奉納していました。昭和に入り、三軒あった家元の後継者がなく絶えてしまいました。萩原家と姻戚関係にあった酒井の垣澤家はその伝統を受け継ぎ、現在に至っています。初代・鹿蔵氏（妻キチは萩原家より嫁ぐ）は、当時、神楽の大御所といわれました綾瀬市寺尾・本間平太夫に師事し、明治四十五年（一九一三）、神道神楽協会本局より「社長可相勤事」の證を得て、相模里神楽垣澤社中を創設。二代目常蔵氏は笛の名手であった父鹿蔵氏から神楽全般の指導を受けましたが、歌舞伎や芝居、新派劇も演じていました。現在の家元・勉氏は三代目で、相模流里神楽の流派を受け継いでいます。

相模里神楽は、面芝居（面子<sup>めんこ</sup>）芝居、神楽芝居とも呼ぶ）も伝承しています。明治の初め、坂東又太郎という旅役者から歌舞伎芝居を神楽師に習わせ、面を付けさせ芝居をしたのが始まりで、愛甲の新神楽と言われ、主に神楽奉納後の余興芝居として演じられました。現在も公演要請により、時々上演しています。

主に厚木市近隣の神社奉納の他、韓国安東国際仮面舞フェスティバルの海外公演、国民文化祭、市の郷土芸能まつり、市内学校での普及公演など、様々なイベントにも出演しています。平成二十八年九月、さいたま芸術劇場で、「第九回 楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演」で単独公演をさせていただきました。





機関誌表紙の絵

相模里神楽垣澤社中 さいたま芸術劇場公演 新作面芝居「紅葉狩」

(戸隠山の鬼女退治)

(作者) 川崎 直樹

二〇一七年 全日本アートサロン 絵画大賞展佳作

## 「第九回 楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演観賞記」

草間 範子（埼玉県児玉郡神川町）

平成二十八年九月九日、金曜日という平日の日程をもともしない大勢の観客に見守られ、「第九回 楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演」（夕公演のみ観賞）が開演した。

第八回までの公演では、埼玉県内の江戸里神楽を取り上げてきた。しかし、今回は県外の神奈川県厚木市酒井の相模里神楽 垣澤社中の皆様によるもので、今までに無い新しい試みとなっていた。このことについて、当初は少々の心配を抱いた。私自身は里神楽に明るいとは決して言えないが、なにしろ「楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演」の筈だ。看板に掲げた江戸里神楽については何だったのか、九回目にしてネタ切れか、そのようなネガティブな公演になってしまうのではと、ちらっと感じたのである。しかし、これが杞憂であったことは、当日の観客数と会場の雰囲気からすぐに気づいた。第九回を迎えた本公演は、「江戸里神楽を見る」公演から「江戸里神楽を考える」ことができる公演へと、足を踏み出したように思う。

さて、夕公演の最初の演目は、御神前之舞「奉幣之舞」であった。神前に奉納される神楽のイメージそのもの、いかにも「神楽」と言えるような舞だった。彩の国さいたま芸術劇場のホールが、その時は神の目前に設けられた神楽殿として祓い清められていった。埼玉県内であっても、社中によって個性は存在する。それを考えれば、やはり神楽というのは同じ形をもって各所で演じられているのだ、と納得した。

奉幣之舞を終えると、次の演目は新作面芝居「紅葉狩」である。



これは「面芝居」であり、神楽とはまた違う性格のものである。神楽師が演じるこの芝居は、演者の登場時から明らかに神楽とは異なった。衣装、動き、話の流れ、どれをとってもしっかりと芝居を演じており、先ほどまでいかにも神楽殿として扱われていたように思えたホールは一気に芝居小屋の雰囲気を持ち、演目は神に対してではなく、観客に対するものとなった。この切り替えは見事であったし、また、驚かされた瞬間でもあった。公演プログラムで記述されているが、埼玉県ではこのような面芝居には出会えない。地域に息づく里神楽やその神楽師は、やはりそれぞれの地域で異なり、その地域での立ち位置のようなものもまた、異なっているに違いないと感じた。

歌舞伎テイストを取り入れた芝居が、地域の人々に喜ばれる光景は、想像に難くない

。面芝居で驚かされた後、始まるのは新作神楽「根国試練」ねのくにしれんである。



さて今度は神楽なのか、と思いきや、その肩書は新作神楽となっている。そもそも神楽に新作というのがまずしっくりこない。これはまた何かあるに違いない。司会者からの解説では、演目中の家族関係が現実の社中の家族によって演じられるという。これは、私がこれまでに接してきた神楽では着目もしなかったような部分だった。果たして、この新作神楽は、この日一番の驚きを与えてくれた。根国試練に登場する神々は、殆ど言葉は発せず神乐的な舞を舞いつつも、どうにも人間らしい、親しみのあるキャラクターとなっている。開演前に社中の家族構成を知らされ、実際の関係性を知って鑑賞するこの物語は、どうやっても人間劇としての面白みを感じるこゝとなる。しかし、そもそも地域に息づく神楽社中のこと、演じ手の素性を含めて地域に愛される神楽なのだろうと想像できる。これは、この人間臭さをうまく使った、ユーモラスな明るい演目だった。特に冒険的であった現代の小道具の登場や、懐かしの歌謡曲を挟んでの場面転換など、里神楽をあくまでも神に奉納する形式立ったものだと思って臨めば面食らうだろう。そういえば、最初の演目で祓い清めた空間はなんのその、客席通路も使つての一大劇であった。しかし、上演中、客席からは楽しいが漏れ、最後の場面などでは、観客の多くが初めて出会ったのであろうこの社中に、親しみを多分に込めたように感じられる温かな見送りが成されたのである。そして、このなんと愉快な演目の後には、再び神楽を離れ、寿獅子・大黒舞・両面が舞われる。権ごんちゃんのお愛称で掛け声をかけられ元気に舞う寿獅子は活き活きと力強く、大黒舞と両面は各々の舞が明るく華やかである。両面が「両面」たることが観客に伝わった瞬間の観客の反応などは、客席の一体感という面からも興味深いものであった。各地から公演を見に偶然集まった見知らぬ観客たちが、社中への興味と親しみを通じて一つのまとまりを得たように感じた。共通の思いを持つ個々人は、まとまりを得て集団となるのに容易い。

この相模里神楽は、様々な演芸を取り入れ地域に愛されることで、地域の人々の気持ちの面での集合を助けているのではないか。地域に入らずに勝手なことをと言われるかも知れないが、私にはそのように思えてならなかった。

以上